

留学生の部

留学生の部 テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会 あるべき社会の姿と私たちの挑戦

私たちには、先人から引き継いだ社会を、自分の子どもたちや後世の人々に、より良い形で伝えていく責任があります。引き継いだ社会を単にそのまま受け渡すのではなく、時代に合わせて改善したり、新しい技術や発想によって抜本的に見直したりしなければなりません。さらに、次世代のために新たな資産を創り出すとともに、発展を阻害するものには適切に対処することも求められるでしょう。私たちは自分たちの子ども世代に、どのような社会を残し伝えていくべきでしょうか。どのような社会を新たに創っていくべきでしょうか。皆さんの知識や実体験に基づいた独自の視点から考察し、その実現に向けて挑戦したいことについて論じてください。

大賞 [留学生の部]

日本と中国を愛し、日中関係の改善を願う筆者の真摯な想いに審査委員が共感。日本と中国の双方の子どもたちに呼びかけた表現手法も独創的でした。

NPI学生小論文コンテスト2012
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会
あるべき社会の姿と私たちの挑戦
入賞作品



お互いの コミュニケーションのため ——世界の未来である君たちへ

武蔵野大学 グローバルコミュニケーション学部 1年

林 猷琮 りん ゆうじょん (中国)

はじめに

このテーマを見た時、22歳の私にはまだ彼女がなく、自分の子ども世代のために何をしなければならないかということについて考えたこともなかった。中国には「子どもは世界の花であり、教師は懸命に働いている庭師であり、社会は肥えている土壌であり、国はパワーが無限な太陽である」という言葉がある。子どもは未来の世界を担っているのです。子育てや教育についての議論はグローバル化し、盛んになってきているが、私たちが今住んでいる世界は本当にそうなのだろうか。

社会の変化及び問題点

つま先で立って競争社会を走るのが、目標でないことは確かである。国と国の領土紛争、右肩上がりで、ケンケン跳びばかりが上手な偏差値社会、繰り返す子どものいじめ問題、それらはいったい何をもたらしたか。例証をあげるまでもなく、毎日の新聞やテレビの報道が教えてくれる。もっと落ち着いた社会を創るために、私たちの価値観をどう定めたら良いのか。

時代の流れにより、社会は発展しつつあり、さらに便利で、豊かな生活の方向に向かっている。祖父が生まれた時代は、世界大戦争

で、教育が受けられず、食べ物があることが人生の最高の幸せだと言われた。父が生まれた時代になって、戦争が終わり、世界の諸国はそれぞれ独立し、国民もちゃんと学校に通うことになった。そして、私が生まれた時代では、科学技術の革命により、パソコンや携帯電話などが国民の生活に染み込み、人間は21世紀の時代を歩き始めた。しかし、今20代になった私の世界で、活字離れ、新聞離れが起きている。落ち着いてイスに座って新聞を読む風景はなく、ゲームや映像に追いかける姿の方が鮮明である。しかし、何か足りない気がする。

——中国にいる私

中学生の時代からずっと好きな中国の近代作家に魯迅がいる。中学の歴史授業では日清戦争や日本の侵略についてしか教えてもらわなかった私は、魯迅が書いた「藤野先生」という文章をきっかけに、日本に対して好感を持ち始めた。魯迅は日清戦争の敗戦によって、日本人の中国への蔑視という風潮の中に身を置き、そして中国人の肉体の病を救う医学は当時の中国社会を救うことができないと知り、医学の勉強をあきらめ、精神的病を治し中国の国民性を改造するために文学に身を投じた。日本留学中、日本の一般の人々とのかわりを通して、日本人の素朴さを感じる。魯迅は学校の休み中に、仙台から東京へ行く

途中に泊まった旅館で、彼が中国からの留学生だとわかって、手厚い待遇を受けた¹⁾。また、ある日東京から仙台に戻る列車の中で、老婦人に席をゆずったことをきっかけに、老婦人と雑談し、せんべいとお茶の差し入れをもらった²⁾。学校でも、藤野先生が担当している講義で生涯忘れられない援助を受けた。ノートは初めから終わりまで、朱筆で添削され、文法の誤り一つ一つが訂正してあるだけではなく、多くの抜けた箇所に箇条書きで説明が加えてあった³⁾。実際、今日本に留学しているたくさんの中国人はこのようにことをよく日常生活の中で感じているだろう。

私たちは今はただ戦争の歴史に束縛され、素直に自分の本当の気持ちと向き合うことができないだけである。正しく歴史を認識することは大切だが、いつも歴史の中で生きていくことだけではだめだと思う。歴史の勉強というのは、子ども世代に悲惨な戦争を語り続けることにより、戦争の恨みや報復感情を残すことではなく、戦争を繰り返さないことを学ぶべきである。嫌なことだけを見て、日本人を嫌ってもいけないし、日本の素晴らしさばかり見て、日本は優れているというふうに思うだけでもいけないと思う。日本に留学している私たちは、現代の日本と中国のため、また両国の未来の子ども世代のために、客観的かつ冷静に日本を見分ける必要があると思う。ただ、本やメディアなどを鵜呑みにするだけではなく、きちんと自分の体験を通して、事

実を判断することが大切だと思う。そうすればお互いに通じ合うものが生まれるだろう。

——日本にいる私

3.11の東日本大震災の当日、すべての電車が止まってしまい、帰れないため、一晩池袋駅で過ごすことになった。駅内で避難している時に、偶然、台湾が大好きな日本人の大学生と出会い、いろいろ話しているうちに彼女と友達になった。彼女は今一生懸命、中国語を勉強している、将来は台湾人と結婚したい、そして台湾に住みたいとよく話していた。ある時、「中国の内陸の人はダメですか?」と聞いたら、「だって中国は危ないじゃん、行けない、殺されそう」と即答された。「なぜですか?」と聞いたら、「戦争が原因で、中国人は日本人のことを嫌っていそうだし、普段YouTubeで見る中国は治安が悪そうだし、空気も悪そうだし…」。私は心が張り裂けて、無言のままだった。そのようなことを言われるのは予想したが、いつも本音を隠そうとしている日本人にそこまで強く言われるとは思わなかった。中国人としてずっと誇りを持っている自分はこの瞬間、失望のどん底に沈んでしまった。同世代の日本人の目には中国がこのように映っているのかと初めて知った。

創り伝えたい社会

日本と中国のすべての人々には伝えられないかもしれないが、今の私にできることは、このような人々に私たち留学生の声を伝えることだと感じた。現代社会の人々のため、そして次世代の子どもたちのためにも。

——中国の未来の子どもたちに

祖国の将来の希望である君たち、一つの物事を見る時に、一般論は危険であり、自ら考え、客観的に理解することが大事だと思う。中国に対する日本の侵略については大変憎んでいると思うが、昔は昔、今は今である。魯迅は「私は人をだましたい」⁴⁾という日本語の文章の中で「悲しいことに我々は相互に忘れることが出来ない」、さらに小林多喜二の死を悼む文章で「日本と中国との大衆はもとより兄弟である」⁵⁾と、魯迅自身の日本に対する複雑な心境を述べている。そして、「排日の声の最中であって、私はあえて断固として中国の青年に忠告を一つさしあげたい。それは、日本人は私たちがみならうだけの価値があるものをいっぱい持っているということだ」⁶⁾。あの戦争の時代に魯迅がそのように言ったことを理解しなくてはならないだろう。現代に生きている私たちはもっと冷静に考える必要があるのではないだろうか。今の日本の生活に、中国の古くからの風習が多

く影響している。特に衣食住を含めた日本の生活、文化の簡素さ、こまやかさ、さらに日本人の礼儀正しく真面目なこと、私たちにあって、勉強できるところはたくさんあると思う。

君たち、少しでも聞いてみてください、日本に留学している私たちの声を。私は日本に留学している4年間に、いろいろな日本人と出会って、嫌な思いももちろんしたが、好きなところがたくさんある。日本に来たばかりの当時の私は、日本語があまり話せなかったが、日本のレストランに行き、メニューを指でさすだけでも店員さんは敬意を持って笑顔で接してくれた。しかし、これが中国だと真逆で店員さんの態度はすごく悪いと感じる。今までずっと中国にいる君たちだが、このような日本を一度見に来るべきだ、そうしたら、その違いをきっとわかってくれると思う。そして、時間通りに運行される電車、ゴミが落ちていない道路、日本社会はあらゆるものの規律がきちんとしている。しかし、今の中国だと、バラバラの時間帯に来る電車やバス、人々は列に並ばないし、行列に入り込むこともめずらしくない。道がゴミだらけで、人口が多いので、このようなことになってしまうことはしかたがないと私も理解できるが、それを私たちの逃げ場にして、このままの中国で本当に良いのだろうか。

中国の昔話「三文魚的故事」(鮭の物語)で「人間は鮭のように時として命をかけて、自ら逆流に向かって這い上がっていく精神が必

要である」というように、もう一度魯迅の時代に戻ってみると、当時の文明の遅れや民族の将来などについて懸念していた魯迅は、日中戦争の危険な状況の中においても「日本の全部を排斥しても、真面目という薬だけは買わねばならぬ」⁷⁾と言っていた。21世紀に中国で生まれた君たちはどう思うのだろうか？

——日本の未来の子どもたちに

日本の未来の象徴である君たち、外国の文化を理解するのに、単にうわべだけを眺めることは良くないと思う。その国の人々の感情面での生活に着目し、文化と生活習慣に対する態度のいくつかを理解することができて、初めてその国について少しでもわかったと言えるのではないだろうか。中国人は確かに昔の日本人を恨んでいるが、日本が大好きな中国人もかなりいると思う。私もその中の一人である。

君たちに聞いてほしいことがある。私には今中国に留学している日本人の友達がいる、その彼らの目から見えている中国の印象はこうだ。「中国に来てから、なかなか生活習慣になれず、どこに行っても人が山ほど多く、所かまわず痰を吐く人がいる。公共トイレは汚いし、トイレトーパーも置いてないし、店員さんの態度が非常に悪い。しかし、中国のことは嫌いではない。中国人は頑張り屋さんで、中国国内は思ったより安全だ

し、大学の学生は非常に努力家で、積極的に声をかけてくれるし、親切な人も少なくない。中国に対する悪い印象はすべてなくなるとは言えないけれど、少なくなっている。中国についても興味を持ち始めた。そして、家電などの製造技術が新興国に急速にキャッチアップされていると同様に、『真面目、勤勉と言えば日本人』という絶対的な評価も、薄れてしまうかもしれない。その友人が中国に行った時に、中国の出入国審査のカウンターに興味深い機械が設置されていたそう。これは、出入国者が直接その場で審査官を評価できる機械で、「Greatly satisfied (大満足)」、「Satisfied (満足)」、「Checking time too long (時間の掛かりすぎ)」、「Poor customer service (ひどい)」の4つのボタンがあり、個々の審査官のID番号毎に評価が集計される仕組みになっている(銀行の窓口などにも類似の機械が置かれている)という話を聞いた。「低い評価になった場合、罰則があるようだ。この機械の設置前後での審査官の態度の変貌ぶりにはかなり驚かされた。パスポートの扱いが丁寧になり、人によっては笑顔も見せるようになった」らしい。中国も頑張っているんだなと思った。だから、他国を評価する際に「**人は不真面目」などと短絡的に国民性を決め付けてしまうことは良くないと感じた。21世紀に日本で生まれた君たちはどう思うのだろうか？

おわりに

国と国とのかかわりがますます増えている今日の国際情勢の中で、いろいろな摩擦や衝突が起き、自分の固有の観念により、相手を認識するだけではなく、異文化の環境において自分の目で直接確かめ、心で感じる事が大切だ。相手の立場に立たないと、相手はどう思っているかということは永遠にわからないと思う。国によって、文化はそれぞれであり、いいか悪いかではなく、君たちはそれについて、その文化を勉強する価値があると思えば、それだけでも十分だと思う。日本では「お互い様」という言葉があるように、お互いの立場に立つことにより、それが自分をもう一度見つめ直すことにもなる。これからの社会にとって、それはいっそう必要になるだろう。

文中注

- 1) 许寿裳「我所认识的鲁迅:《民元前的鲁迅先生》序」『鲁迅回忆录(专著)』(上册)北京出版社、pp.476、1991年
- 2) 许寿裳「亡友鲁迅印象记:二十四日常生活」『鲁迅回忆录(专著)』(上册)北京出版社、pp.291、1991年
- 3) 鲁迅「藤野先生」『朝花夕拾』人民文学出版社、1926年
- 4) 鲁迅纪念馆编『鲁迅日文作品集』上海文艺出版社、pp.45、1981年
- 5) 鲁迅纪念馆编『鲁迅日文作品集』上海文艺出版社、pp.7、1981年
- 6) 鲁迅(編・相浦杲ほか)『鲁迅全集』全20巻 学習研

お互いのコミュニケーションのため
——世界の未来である君たちへ

- 究社、第十巻、pp.421、1986年
- 7) 内山完造『魯迅の思い出』社会思想社、pp.47、
pp.89、1979年

参考文献

- ・ 孫長虹 「魯迅の日本観」2003年

優秀賞 [留学生の部]

日本における留学生就労の難しさが、優秀な人材の定着を阻害しているという、留学生ならではの捉え方と具体的な解決策が評価されました。

NPI学生小論文コンテスト2012
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会
あるべき社会の姿と私たちの挑戦
入賞作品



「留学生活用社会」の創造

——外国人留学生就職における
問題の解決と留学生自身にできること

東京大学 大学院 経済学研究科 修士課程 1年

張 辰飛 ちょう しんひ (中国) (左)

東京大学 大学院 工学系研究科 修士課程 2年

馬 一丹 ば いちだん (中国) (右)

1. はじめに

2008年7月29日文部科学省によって策定された「留学生30万人計画」では、日本が世界に対してより開かれた国へと発展する「グローバル戦略」の一環として、2020年を目途に日本国内の外国人留学生受入れ30万人を目指している。また、高度人材受入れとも連携させながら、国・地域・分野などに留意しつつ、優秀な留学生を戦略的に獲得していこうとしている。日本学生支援機構の調査の結果では、留学生数は1998年度以降、2006年度と2011年度での減少を除き、依然として増加傾向にある¹⁾。しかし、留学生

からの就職目的の申請件数は2009年度から2年連続減少となり、2006年度が2011年度とほぼ同じ水準である²⁾。留学生受入れが拡大している一方、卒業・修了後の社会の受入れが順調に進んでいるとは言えない。

また、日本学生支援機構の外国人留学生進路状況調査によると、学位取得者のうちの日本国内で就職する率は2008年度において25.3%、2009年度は17.8%である³⁾。しかし、2009年度私費外国人留学生生活実態調査「卒業後の進路希望」において、私費留学生のうち56.9%が「日本において就職する」を希望している⁴⁾。さらに、日本での就職を希望する留学生の希望職種と実績もかなり異な

「留学生活用社会」の創造

——外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること

る⁵⁾。留学生にとって日本での就職が必ずしも希望通りに展開しない状況が明らかとなっている。

予定通りに「留学生30万人計画」の目標を達成できたら、2020年までに外国人留学生の数は2012年現在の約2倍に達する。日本国内での就職を希望する留学生の増加傾向は、今後も続くと予想される。優秀な人的資本をめぐる「人材競争」が国際的に激化してきている中で、日本の国際競争力を強化するために、「いかに高度人材の獲得という目的に合致して留学生就職支援の取組みを推進するか」が大きな課題となる。経済成長や新たな価値創造に資することが期待される、優秀な能力を有する留学生の日本国内就職を促進すると共に、日本での就職意欲のある留学生に成長を支えるプラットフォームを提供できるよう、つまり日本の国益と留学生の希望が同時に実現するよう、留学生就職における現状や問題点から、私たちの子ども世代に創り伝えたい「留学生活用社会」のあるべき姿と私たち自身が挑戦したいことを考えていきたい。

2. 留学生就職の現状・問題

近年、日本企業の海外進出や業務国際化の影響により、外国人留学生に対する新

卒採用ニーズはますます高まっている。一方、人材の供給源としての留学生も増えつつある。ところが、せっかく素晴らしい能力を持っていても、採用試験で苦勞する留学生が多いのが現状である。留学生就職困難の理由について、以下に4つの要因を述べる。

(1) 就職活動の早期化・長期化

留学生にとって、日本における就職活動は本国での就職活動とは異なっている場合が多い。アメリカでは大学生が在学中に就職活動をすることはほとんどない。中国ではおよそ卒業9ヶ月前(大学4年生/修士2年)から就職活動が始まり、半年間ぐらい続く。しかし、歴史と文化により、日本の就職活動は早期化、長期化の傾向がある。特に事務系職種では大学3年生の春から初夏にかけて就職活動を開始することが多い。多くの大学では、1、2年生時は教養や専門分野へ入る前の基礎的な知識を身につけるための講義が中心であり、3年生から専門を絞った講義やゼミナールが開始される。専門的な教育を受けるようになる時期に講義や卒業研究を抜けて、就職活動を行わなければならない。さらに、2年制の大学院では1年生が入学後すぐに就職活動の準備に取り組み始める。院生が多い、過半数が人文・社会科学を専攻する留学生にとって、日本語や就職活動に対する理解の欠如に加えて、就職活動早期化のネガティブな影響がより顕著になる。

「留学生活用社会」の創造

——外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること

1年以上も続く就職活動は留学生自身を鍛える良いチャンスだと思われるが、その困難さのため、日本国内での就職を諦める留学生もいる。

(2) 留学生の日本語力の不足

2011年度東京大学留学生就職（進路）に関するアンケート調査によると、「日本での就職活動で不安なこと」において、日本語力に対する不安が上位を占めている。留学生にとっては、日本語力が就職活動において一番重要な決め手だと思われる。特に文系留学生にとって、就職活動は日本語力が勝負になると言っても過言ではない。日本の就職活動ではほぼ全部日本語を使っている。数少ない企業を除き、最初の書類選考や筆記試験から最後の面接まで、英語を使うチャンスはかなり少ない。このような採用システムにより、留学生に対する日本語力の重要性は一層強まる。

近年、「留学生30万人計画」の推進と共に、海外から留学生を引きつけるために、英語のみによる学位取得が可能となるプログラムが開設され、英語のみによるコースが大幅に増加した。このような英語プログラムは大学院課程がメインである。2年制英語プログラムの留学生は入学時に日本語力を備える人が少ない。なおかつ就職活動の早期化により入学半年後から就職活動に突入し、日本語力を向上させる時間は圧倒的に少ない。また、

英語のみによるコースの増加により、以前に比べて留学生が日本語を学べる機会は減っている。採用試験で日本語を使うのが一般的であることにより、英語プログラムに入学した留学生は就職活動において不利な立場におかれることが明らかとなっている。日本語力の不足の影響で、能力が高いと評価された優秀な留学生の中でも内定を取れない人もいる。

(3) 企業の意識と体制問題

日本のことをよく知っていて、かつ語学能力に優れた日本にいる留学生を募集したいと考えている企業が多い。そして日本の企業において留学生向けの特別な採用基準というのはほとんどない。原則として留学生は日本人学生と同じ基準で判断される。しかし、グローバル展開が進んでいる今、日本企業が求めているのは世界で戦える多様な人材だと思う。日本人学生と同じ判断基準で留学生を選ぶことで、日本人の思考や行動パターンに近い留学生を採用する可能性が高い。多様な特性を持つ留学生が採用試験で落ちることにより、違う文化による相乗効果が期待できなくなり、人材の多様性にも欠ける。また推測だが、日本人学生と同じ基準で留学生を採用する理由の一つは、企業側が人材の多様性を向上したいが、留学生の能力を判断できるノウハウあるいは日本人と異なる留学生を管理する健全な体制を持っていない

「留学生活用社会」の創造

——外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること

ことではないかと思う。

また、日本において「新卒採用」が重視されていること等の習慣により、海外採用で学生に求められる GPA、在学中インターンシップの実績、即戦力などより、日本の就職活動では将来のポテンシャルが大切だと思われる。このような採用基準は積極的側面があるが、国際人材市場で優秀と判断される留学生が日本の採用試験で高く評価されにくい。

(4) 留学生向け情報の欠乏

先に示した東京大学留学生就職（進路）調査の結果によれば、「就職の知識不足」は「日本語力に対する不安」を超えて日本での就職活動で一番不安なことである。就職活動がビジネス化した日本では、就職ポータルサイト（リクナビなど）、就職マニュアル本、就職塾、セミナー、大学就職課などからの情報やサービスが充実している。しかし、留学生にとって現状では必ずしも十分に機能していない。日本語力不足は原因の一つである。また、一般論や建前ではなく、留学生の状況に応じて、キャリアパスや就職活動対策などに関する情報や指導は充実とは言えない。日本語力の問題に加えて、どのように就職活動を始めたらいいか分からないため、就職活動の準備を順調に整えられず、留学生就職に困難をもたらすことになる。

3. 社会のあるべき姿・私たちの挑戦

前章で述べた、日本にいる留学生の就職を妨げる4つの問題点を解決できれば、留学生がより良い環境で就職活動に取り組み、日本もより優秀なグローバル人材を獲得できるのではないかと思う。この考えに基づき、私たちが次の世代に創り伝えたい日本社会のあるべき姿は以下ようになる。

- 通年採用の普及により日本における就職活動の早期化・長期化のマイナスの影響を抑える
- 日本語教育支援の強化や英語による採用の増加を通じて、外国人留学生が日本語力に困らず順調に就職活動を行う
- 柔軟な留学生採用基準を導入し、有能な留学生が正しく評価され、日本社会に定着し活躍する
- 留学生向け情報の充実化を通して、日本での就職意欲のある留学生が有用な情報・サービスなどを取得する

このような姿を持つ「留学生活用社会」において、日本の国益と留学生の希望が最大限に実現することになる。本論文が目指すのもこのようなところにある。

「留学生活用社会」の実現のためには、政府、企業、学校、外国人留学生、日本人学生を含めた社会全員の努力が不可欠である。ここでは、筆者らの将来への抱負も兼ねて、

「留学生活用社会」の創造

——外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること

「留学生活用社会」の実現を目指そうとする私たち留学生が挑戦すべきことや挑戦していることだけを述べたい。

まず、積極的に日本人と外国人留学生の交流機会を作り、既存の就職リソースを効率的に活かす。日本社会の変化を待つのではなく、留学生が現状を認識し、その現状に応じて自分自身が変わらなければ、就職難が続くだろう。日本人と交流するチャンスをつかみ、積極的に日本語教育支援や就職センターの指導を利用し、少しずつ経験を重ねて日本語力を向上させていく。また、周りの日本人学生や先生と接することは大事だが、大学外でボランティア活動などに参加して社会人と付き合えば、日本人のやり方・考え方に対する理解を深めることができるだろう。日本語力と日本文化に対する理解の強化により、日本での就職活動に感じる不安を解消できると思う。

そして、留学生同士のネットワークや協力体制を立ち上げる。留学生個人一人でも、フェイスブックやネット上の掲示板に就職活動の心得などを発表することだけでも、誰かの役に立ち、留学生全体の就職活動に良い影響を与えることになる。インターネットを活かし、大きなネットワークを作り出すのも不可能ではない。筆者らは以前から留学生就職問題に注目し、留学生就職の現状を改善しようと思い、2012年7月にヤフーグループというインターネット・サービスを利用し、「東

京大学留学生就職グループ」を立ち上げた。現在23名の留学生に無料で公開・非公開の留学生向け就職セミナーに関する情報を配信している。より多くの留学生に有用な情報やサービスを提供するために、グループのプロモーション活動や新規業務を企画している。また、筆者の一人がある人材開発ベンチャー企業に提案し、実際に日本で就職活動を経験した留学生内定者を招き、留学生向けのセミナーを開催した。さらに、留学生同士の情報交換の機会作りとして、2012年4月から毎月筆者らは中国人留学生座談会を主催している。

以上の行動を通じて、私たち留学生がすべての問題を解決できるわけではなく、少しでも「留学生活用社会」の実現にお役に立てたら光栄である。

4. まとめ

今年は「留学生30万人計画」が策定されてから4年目になる。予定通りに「留学生30万人計画」が実行されると、2020年の日本における外国人留学生数は2011年の138,075人から、およそ2.2倍の30万人にまで増加する。これに伴い、日本で就職したい留学生のニーズを無視できなくなる。ポードレスな世界で人材にとって魅力的な就職環境をいかに創るのか、これは日本の政府や

「留学生活用社会」の創造

——外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること

企業だけの課題ではなく、次の世代の留学生後輩のために日本で生活している私たちが考えるべきことである。

文中注

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html
- 2) 法務省入国管理局「平成23年における留学生の日本企業等への就職状況について」表1及び図1
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri07_00061.html
- 3) 独立行政法人日本学生支援機構「平成22年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11_d.html
- 4) 独立行政法人日本学生支援機構「平成21年度私費外国人留学生生活実態調査概要」
<http://www.jasso.go.jp/scholarship/ryujchosa21.html>
- 5) 芦沢真五「留学生受入れと高度人材獲得戦略ーグローバル人材育成のための戦略的課題とは」『留学交流』Vol.10、2012年1月

参考文献

- ・ 文部科学省、他「「留学生30万人計画」骨子」、2008年7月29日
- ・ 国際人流編集局「日本での就職を希望する留学生の意識と就職支援のあり方」『国際人流』2011年11月
- ・ 井上洋「海外留学生は日本の新しいイノベーションを担う大きな戦力になる」『ナジックリリース』第18号、2010年

